

RIEB 次の100年へ

〔中堅・若手の教員による座談会〕

櫻本 正博 教授
企業情報研究部門
財務会計分野

岩佐 和道 准教授
グローバル経済研究部門
国際経営分野

高槻 泰郎 准教授
グローバル金融研究部門
経済史分野

松本 陽一 准教授
企業競争力研究部門
イノベーションマネジメント分野

柴本 昌彦 准教授
グローバル金融研究部門
マクロ実証分析・金融政策分野

西谷 公孝 教授
企業競争力研究部門
国際経営分野

RIEB 次の100年へ [中堅・若手の教員による座談会]

それぞれの強みを活かして、 経済学・経営学を多角的なアプローチで研究

榎本 今回は「中堅・若手の教員による座談会」にお集まりいただきありがとうございます。私が本日の座談会の司会を務めます。最初に皆さんが現在はどういう研究をなさっているかをお伺いしたいと思います。岩佐先生からお願いします。

岩佐 私は主に動学的な貿易モデルで、経済の発展や成長に貿易が与える影響などについて理論研究をしています。研究の特色としては非相似拡大的な選好を導入するなど、需要面に焦点を当てた研究を行っています。私が所属するグローバル経済研究部門には、ラテンアメリカ、インド、中国といった、これから発展していく興味深い国々の経済を専門に研究されている先生方がおられます。今後は部門の先生

デジタル情報家電というような分野で日本の会社が新しい技術を生み出したんだけど、急速に新興国の企業にキャッチアップされて収益的に苦戦しているという、そういうことがあったものですから、それについて研究をしていました。ただ、時代が変わっていきまして、当時は技術開発はうまいんだけど、商売が下手というのが日本の会社の姿だったんですけど、結局、商売が下手だと次の技術開発へうまくお金が入っていかないので、そもそも新しい技術を生み出すところも含めて課題が広がっているように思います。イノベーションと経営戦略と二本立てですけれども、私の研究としては経営戦略にウエートを置いてやっているところです。

柴本 私の現在の関心は4つございます。1つ目は、金融政策に関する実証分析です。計量経済学や時系列分析といっ

西谷 私の専門はサステナビリティ経営です。環境、社会、ガバナンスを考慮した経営のことです。手法としては定量的な分析をこれまでずっとしてきました。例えば、サステナビリティ経営に取り組むときちゃんと利益にも繋がることをデータで証明しているほか、一方で、利益が出たからそれで良いということではないので、環境や社会に対しても好影響があるということも明らかにしてきました。こうした環境や社会と利益に常にウイン・ウインの関係があれば望ましいのですが、必ずしもそうなるとは限らないために、現在は、SDGs(持続可能な開発目標)とも関連付けながら、サステナビリティ経営の望ましい今後の在り方について研究をしているところです。

榎本 私は財務会計が専門です。中でも企業の報告利益を財務データとか株式市場のデータで測定した利益の

意味では、別次元の貴重さがあります。

松本 鐘紡資料は工場単位で詳細なことが分かります。

榎本 岩佐先生の方でも結構データを使ったりしますか。

岩佐 本当は使うべきですがあまり使っていません。

柴本 ビュアなセオリーの方もいらっしゃるからね。

岩佐 しかし、最近は、データを使わないと海外ジャーナルにアクセプトされないという別問題があります。

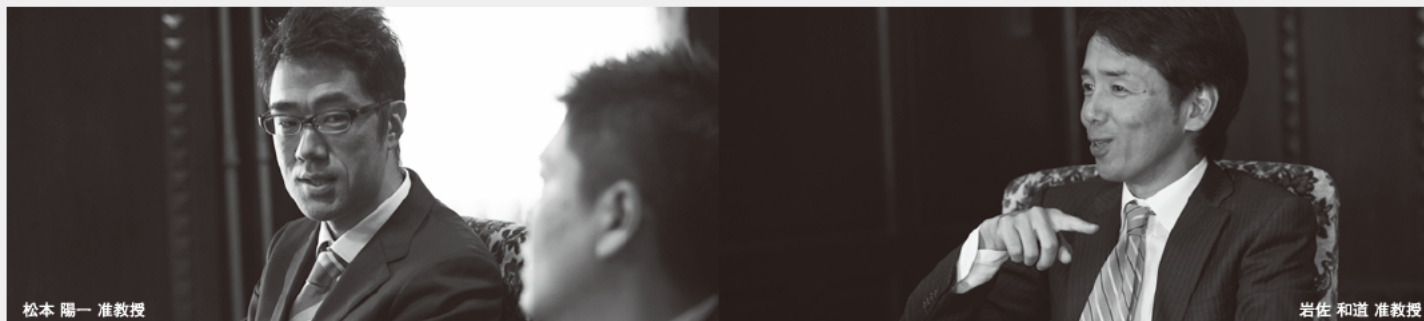
西谷 一方で、理論をデータで証明する場合でも、先行研究と違うことを書くのと、いくらデータで証明しても、レフェリーが納得しないことがあります。

柴本 結局、海外でのプレゼンスを高めておかないと、そんな研究は無視すればいいとなるんだと思います。

松本 あと、編集長が誰かとか、編集長の説に従うとか。



柴本 昌彦 准教授



松本 陽一 准教授



岩佐 和道 准教授

方と協力して、それらの国々が個別に抱える課題について検討し、それらの国々で有効な政策とはどのようなものなのか、また経済のグローバル化がそれらの国々に及ぼす影響について、実際のデータを基にした研究を行いたいと考えています。

高槻 私は江戸時代の経済、金融について研究をしています。江戸時代の物価や気象データなど、さまざまなデータを使って計量的な分析をしたり、あるいは当時の人たちが書いた文章を読んだりすることで当時における市場の動きや人々の行動原理を復元しています。私が専門にしている経済史というジャンルでは、データを使った分析をしなければ論文が載らない状況になってきています。何よりデータ自体の新しさ、オリジナリティが国際業績をつくる上では大事になってきています。その意味で、研究所の社会科学データアーカイブスには、希少性の高い、オンリーワンのデータが含まれるので、今後ぜひ分析対象に含めていきたいと考えています。

松本 私はイノベーションと経営戦略と、それぞれ専門というか、その二つを掛け合わせたものが専門です。2000年代初頭以降、イノベーション研究者の中で1つの問題意識だったのは、特に

た手法を応用することで、経済学が考える因果関係に基づいた基礎研究を行っています。2つ目は、期待形成メカニズムに関する文理融合研究です。現在、上東先生が研究代表者を務めておられる大型科研基盤研究Sの研究分担者として研究を進めていまして、いわゆる理系研究者との交流や共同研究を通じて、AIといったデータ工学等の知見を取り入れた研究を行っています。3つ目は、先ほど高槻さんにご説明いただいた数量経済史に関する研究です。私自身は経済史の専門家ではございませんが、高槻さんや他の経済史研究者との共同研究を通じて、過去の事例から得られる現在の経済に関する含意を検討しています。4つ目は、大同生命様との連携により利用させていただいている中小企業・小規模事業者向けアンケートデータを用いて、数量的な分析を行っています。加えて、神戸大学金融研究会・金融システム部会等のプロジェクトの参加を通じて、行政機関、金融機関、税理士・中小企業診断士の方といった実務家の方々と意見交換をしながら、中小企業経営にかかわる日本経済の諸問題を検討しています。

質というものがどういう状況でどう変化するかを実証的に分析しています。具体的には、毎年のように新設・改訂される会計基準によって利益の質が実際どのように変化するかとか、国際的に利益の質がどう異なるかを各国の制度と絡めて調査しています。ほかには債務契約、具体的にはトレード・クレジットですけれども、それと利益の質の關係に日本的なコーポレート・ガバナンスがどのように影響するか分析しています。わが国ではこういった会計分野の実証研究は30〜40年ほど前からさかんに行われていますが、研究所ではその当時からこの分野の論文が書かれています。

研究の可能性を広げるオンリーワンな資料がある

西谷 研究所は財務データなど他のところにはないたくさんのデータベースがありますね。これだけでも研究の実現可能性がぐんと上がります。

榎本 歴史の分野もありますね。

高槻 新聞記事文庫や鐘紡資料などがあります。これらはオンリーワンかつ、どれだけお金を払っても手に入らないという

柴本 研究者コミュニティに仲間入りすることが大事ですね。

榎本 なにかしらのグループに入っておかないという話ですね。

柴本 そう、そう。そのグループに入っていなかったらもう論文を見てもくれない。だからグループに入るのがすごく大事だと思うんですね。科学的には正しいにもかかわらず無視されてしまうかもしれません。

松本 そう、そう。

柴本 もったいないですよ。

大型研究費の獲得には 研究実績・研究者ネットワーク・情報発信が不可欠

榎本 次は研究費の獲得についてです。科研費などの外部研究費、さらに研究所としては間接経費を確保できる基盤B以上の科研費が大事になっています。今回のメンバーでは西谷先生、高槻先生、松本先生は基盤B、岩佐先生と高槻先生が国際共同研究加速基金を獲得していますので、その経験をお話いただけますか。

岩佐 外部の研究費を取ろうと思うとまずは自分で着実に

RIEB 次の100年へ [中堅・若手の教員による座談会]

研究をして、学会で認めてもらって、声をかけたら集まってもらえる人物になることだと考えています。国際共同研究加速基金であればさらに海外の研究者と研究計画を立てることが必要でしょう。

高槻 最近、科研の審査が変わってきて、他分野の人が審査に加わる形になっています。すると大型科研を取るためには、分野横断的な形で異なるディシプリンの先生に入ってもらって、複合チームで共通のテーマを追う研究を志向していかないと採択が難しくなる印象です。私は今、江戸時代の気候データの復元が専門の理系の研究者たちと共同研究をしていますが、理系の気候学の先生、柴本先生のようにデータ、時系列分析が専門の先生、そして経済史の私が連携して分析を進めています。このように多分野に訴求する科研を申請するアプローチが今後とても大事になると思っています。

なったので、海外のビッグネームと共同で、しかも世界で初めてのデータセットで、海外ジャーナルにこうすれば載るということをお願いして計画書を書きましたら、それがうまく通った形です。

柴本 海外の先生とのコラボレートを明確にしたということですか？

松本 そうです。上東前所長のときの所長裁量経費で、先にデータセットを契約して、パイロットスタディ的な結果を出しました。そしてそのデータを使って海外のビッグネームとの共同研究を整えたという意味で、事前の準備がうまくいった恵まれた例だと思えます。

高槻 ネットワークとか、データは既にあるよとかいう書き方をしないとだめですね。今、経営系はどうですか？

西谷 やっぱり基盤Aとかになってくるとどれだけ具体的に書いているかと、本当にそれができるのかがきちんと書かれて



柴本 それ、すごく大事だと思うんですけど、なかなか難しいですね。各分野で結構考え方が違うことがあります。

榎本 どういう点が違いますか。

高槻 気候学者たちは気候によって様々な現象を説明したいというインセンティブを持っています。人間の社会経済の変動には気候が影響しているんだというような。でも日本史や経済史の側からすると、いや、気候だけじゃないでしょうと。文化、政治、社会システム、いろんな面があるでしょうと。こうした溝がはっきり出てしまったことがひとつの例ですね。ただし、協業して初めてわかった面もかなりあったので、一長一短というのが私の印象です。

柴本 僕もほぼ同じ印象です。

榎本 松本先生、ご自身の科研費獲得からの経験はありますか？

松本 私は基盤Cのときまでは非常に素朴に、こういう研究体制だったらいい研究ができそうだと思うような研究体制を敷くことを考えていました。基盤Bになって、時代背景から、経営学で急速に海外ジャーナルの業績を求められるように

いるかが重要になってきます。基本的に科研の申請書は一人が書くじゃないですか、幾ら分担者に入ってもらっても。でも基盤Aを取ろうと思ったら、自分のアイデアだけでは限界があるので、申請段階から共同研究者との積み上げが必要になってくる気がします。もちろん一人で書いて基盤AとかSとか取る先生はいます。でもそういった先生ばかりじゃないので、全体的に底上げしようとしたら、事前に何人かで集まって申請書段階から具体的に研究をどれだけやっていけるかを考えなければならないでしょう。特に研究所はデータが充実しているので、それをベースにしているんな分野の先生がどういことができるかを常日ごろから議論していくのも必要だと思います。

榎本 研究所はセミナーとかには予算があって人が呼べますからね。

高槻 そうですね。ネットワークづくりという意味では大きいアドバンテージですね。

西谷 やっぱりメンバーが、非常に重要なので、ネットワークがまずは必要なかなと。

榎本 柴本先生どうですか？

柴本 研究費の獲得で個人の業績は当然として、その上で3つの点が重要だと思います。1つは経験です。今、上東先生の基盤Sに入っていて、そこで研究計画書の書き方、組織の運営、研究費獲得のためのプレゼンの仕方がわかりました。

2つ目は研究者ネットワークです。私の金融の分野だと神戸大学の金融研究会で研究者と実務の方とネットワークができました。さらに海外のネットワークで、トップ・ジャーナルを狙うには著名な先生と知り合いになっている必要があるなど、ここ4、5年ずっと思っているんです。幸い研究所は授業負担とかがほぼなくて、学会報告と在外研究する機会が結構あって、ネットワークを構築しやすいです。

3つ目は情報発信です。研究所はシンポジウムとかワークショップとかが開きやすいです。さらに事務の方も国際カンファレンスにも長けています。これは研究所の特色です。なので私の業績と研究所のリソースがあれば大型科研を狙えるチャンスは十分にあると、個人的には思っています。

榎本 すばらしい意見をありがとうございます。個人の業績がまずは大事というのは当然のことですね。

若手研究者が研究に専念できる環境が整っている

榎本 所長から、今後の研究所のマネジメント体制について、若手から忌憚のない意見をお願いしたいということです。私は研究所の前は静岡大学と東北大学で部局の組織が大きいところで勤めていました。研究所で驚いたのは所長に意思決定等の負担が集中しているのではないかとということで、多少仕事を分散して所長の負担を軽減してもいいかと思えます。でもトップダウンという形態も一つの手です。皆さん、その辺の経験はいかがでしょうか。

高槻 いつか上の立場になったときには、当然研究所の全体の利益を考えねばならないでしょうけど、今のところ研究所の帰趨を決める意思決定は執行部で、という安心感のもとで、若手は研究に専念できています。

松本 世の中の趨勢が大学レベルでいうともっとトップダウンで、ということになっていますので、所長がかわると何かが変わるというほうがマネジメントとしてはわかりやすいと思います。

柴本 決定は執行部で行っていて、所長一人で決めているわけではないでしょう。

松本 下から上がってきた話を何となく利害調整してまとめるだけではない姿であるべきなので、所長に権限が集中しているというよりはトップで、何人かで意思決定をしてこういう方向に行くというようにやるのが世の趨勢でしょう。

榎本 プロセスがはっきりわかればいいってところですかね。

松本 そうですね。

榎本 皆さん研究に専念できているから不満はないということですね。

岩佐 はい。

次の100年の研究所のために、研究費が集まる実績づくりを

榎本 用意した議題は終わりましたが、何かこれは言いたい、話したいことはありますか。何か今後の100年に向けて…

高槻 100年後の研究所…神戸大学だってあるのかどうかという、近畿連合大学とかってなっているかもしれない。

柴本 六甲台の僚友会である先生が言っていたけど、あまり国に振り回されないように独自でやっていかねばならないと思うところがあります。運営費交付金だけに頼るのはもう限界がきているのかなということです。研究所としてもとにかく外部資金を集めてくるといことです。

松本 でも企業は社会科学とはあまりつき合いませんからね。

柴本 企業に対してシンポジウムとかを増やしていく必要はあるのかなと思っています。

高槻 私は今、日本学術会議の連携会員として若手アカデミーというものに出席しているんですけど、そこではクラウドファンディングを研究に応用することについて議論が行われていますけどね。

柴本 研究費を外から取ることは大事だと思うんですけど、難しい面があるでしょうね。やっぱり社会科学になかなかお金は出ないですものね。

榎本 我々も提供できるものはあると思うんですけどね。

柴本 アメリカとかだって、僕がカリフォルニア大学のサンディエゴ校にいたとき、カリフォルニアは財政も悲惨な状況だったので、州からの資金に頼ってられないとかで、民間企業からも資金を調達していました。

松本 そういうときにエビデンスがあるかどうかで物を言うところがあります。企業の人もファクトを見せられると、なるほどと納得するので。

柴本 そうですね。だから何かうまく成果を売っていく必要があるのかなと思って、そうしないと資金が集まらないかなと思います。でも100年後となるとどうなるか。これは直近の話です。

西谷 やっぱり外部資金の獲得が重要ということですね。

榎本 先ほどの話に戻りますが、我々が研究を続けていくためには、個人の努力もさることながらチームとして外部からの研究費を獲得していくことがますます大事になっているということですね。それでは今日はどうもありがとうございました。